

## 大学における翻訳学習者の翻訳イメージ ——自由回答の分析から

田辺 希久子

(神戸女学院大学)

### Abstract

*While the number of Japanese universities with programs on translation/interpreting has increased recently, the focus of translation education is shifting from the old Grammar Translation Method to more practical training with real-life materials. Although a variety of educational ideas and methods have been proposed by many scholars and teachers, there is not much investigation into what translation learners actually experience, feel, and value in translation classes. Thus, this paper focuses on the “image” of translation held by university translation learners using a collection of questionnaire responses accumulated since 2011. By focusing on the questions asking learners’ “image” of what translation entails and analyzing the responses using qualitative and quantitative analyses, I will show that learners’ post-course images of translation were more organized compared to their pre-course images, and identify several shifts between the pre- and post-course images of translation.*

### 1.はじめに

日本において通訳・翻訳をカリキュラムに導入する大学が増えている中、従来の文法訳読法ではなく、日本語としての読みやすさも意識した翻訳授業が、実務経験をもつ実践家の指導で行われるようになってきている(長沼 2008)。言語学習における翻訳のこうした変化は最近起きたものであり(伊村 2003: 64)、英語教育の分野からさまざまな指導法への提案がなされているが(染谷 2010 など)、学習者が翻訳授業においてどのような経験をしているかを探索的に検討する研究は行われていない。そこで本稿では、2011年から筆者が行ってきた自由回答式の質問紙調査のデータを用いて、翻訳学習者の翻訳に対するイメージを分析する。使用するデータはもともと翻訳学習者の動機づけや自己効力感など、いくつかの教育学的項目を調査するために収集されたものだが、本稿ではそのうちの翻訳のイメージに関する部分のデータを使って分析を行う。分析の結果として、受講前と受講後では翻訳に対するイメージが明らかに整理されていることがわかった。また回答に現れた特徴的な主題をとりあげ、分析結果を述べ

---

TANABE Kikuko, “University learners’ image of translation: Content analysis of open-ended responses,” *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 173-185. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

ていく。

## 2. 本研究の目的と背景

本研究では目的を「大学における翻訳授業受講生にとっての翻訳のイメージ」とする。分析に用いる質問紙調査は筆者が2011年から、期待や効力感(学習の進捗に対する学習者の主観)など、近年教育分野で注目されている概念の実態を調べるために実施したものである(Tanabe & Minamitsu 2010; Minamitsu & Tanabe 2012)。本研究では回答データの量を確保するため、質問を変えるのではなく、すでに蓄積されたデータをそのまま流用し、その中の「イメージ」を尋ねている質問項目に絞り込んで分析を行うこととした。ここでいう「イメージ」とは、以下のようなものである。

「イメージ」とは、人が何かに対して抱く概念を意味しており、その人がそうだと信じる主観的知識を指す。一例として、教師教育に関して Elbaz (1981) が用いている「イメージ image」の概念を取り上げる。それによると、教職のような実践的知識は理論的知識より劣ったものと見られがちであるが、むしろその特質を尊重して、論理や命題的知識によってとらえるのではなく、たとえその内実が曖昧であろうと、その知識が使用される局面においてとらえるべきだとする。そして実践的知識の構造をとらえるために、実践的知識と実践・経験・個人的次元との関係を表す概念として、「実践のルール」「実践の原理」「イメージ」を想定している。実践のルールとは、実践的な場面に対処するための具体的な指針であり、たとえば「生徒の言うことに可能な限り耳を傾ける」といった方針である。実践の原理はもう少し幅が広く、意図的である。ある問題についてよく考えた結果、原理が宣言され、過去の問題を現在の問題にあてはめる際に使われる。たとえば「子どもが何でも話せる環境をつくる」などである。最後の「イメージ」はあいまいで包括的であり、教師は感情、価値観、ニーズ、信念などから比喩的表現(イメージ)を生み出したり、経験や理論的知識などの知識によってそれを裏付けたりするとされる。つまりイメージは、教師の思考を導いたり、知識の整理を助けたりするものであり、上の例に従えば「心の窓を開いている教師」といった比喩的表現を指す。「イメージ」は「実践のルール」「実践の原理」よりも幅広い概念であり、知識、経験、感情、価値観、ニーズ、信念などの多様な要素を含むことから、個人の内面をより全体的に表すものであり、その教師が全体として抱いている目的が表現されているといえよう。

翻訳の知識もまた、教職の知識と同じように実践的知識である。また教師でなく翻訳の学習者に目を向けたとき、彼らはプロの翻訳者になることを目指しているわけではない(長沼 op.cit)。本稿で使用した質問紙調査には「学習者が好む教材」を尋ねる項目もあったが、その分析(未発表)により学習者の傾向を分析した結果、職業や海外での仕事などの実益への意識が高い学習者、テキストの深い読み込みに関心をもつ学習者、翻訳に純粋な楽しみを感じる学習者など、異なった傾向が見られた。また教える側が念頭に置いている翻訳学習の目的も、語学力強化、異文化教育、教養など多様である(長沼 op.cit)。したがって特定の法則によって学習内容の合理性を測るより、学習者が全体としてどのような「イメージ」をもち、そ

れによって自覚されていない暗黙の目的がどのように導かれているかというプロセスを知ることが、Elbaz の考察対象である教職と同じように有効であり、論理や命題的知識よりも、その知識が使用される局面においてとらえるのがふさわしいだろうと考えた。

調査を行うにあたって、日本における翻訳教育を取り巻く背景を確認しておこう。日本では明治以来、翻訳が知識獲得の重要な手段であったことから、翻訳者の地位が高いことが知られている (Bilodeau 2012)。また明治初期から正則(英語話者による英語を使った英語教育)と変則(訳読を中心とした英語教育)が並立していたのが、政治状況などから変則が主体になり、さらに明治維新後の学歴社会と受験競争で、英文和訳・英文解釈が大学入試に用いられるようになり、日本の語学教育は西洋的な文法訳読法(Grammar Translation Method)と似た形態をつい最近まで採用していた(伊村 2003; 江利川 2011)。さらに西欧文化の地位が高く、原文重視の逐語的な翻訳が伝統的に優勢だったこと(水野 2011)を考え合わせると、大学生の翻訳イメージにも書き言葉中心の訳読という学習法が影響を与えていると考えられる。現在、日本の語学教育は転換期にあり、文法訳読教授法はコミュニカティブ・アプローチへと変わりつつあるが(綾部 2009: 155)、本調査でも明らかのように、授業を受ける前の未修者はさまざまな既成概念の束縛を受けている。一方、翻訳者の地位が高いため、憧れの対象としての翻訳者イメージがあることも、以前の調査(Tanabe and Minamitsu, Minamitsu and Tanabe, op.cit.)にて観察されている。こうした憧れは形を変えながら残っていることが、本稿の未修者回答からもうかがえる。90年代に入って大学で職業的・専門的な翻訳通訳を教えるようになって以来、大学での翻訳授業が学習者のそうした「固定観念を払拭」(氏木他 2010, 教授用資料より)することを目指していることは、目的の異なる多様なジャンルを教材とし、コミュニケーション状況に合わせた翻訳を教える教科書が多いことからわかる(そうした教科書の例として、田辺・光藤 2007, 2008, 氏木他 ibid.など)。本調査の対象となった授業も、そうした方向性を目的として掲げている演習の授業ばかりであり、異なるテキストタイプの教材を用いている点でも共通している。

以上のような文脈を踏まえつつ、本調査では学習者の翻訳イメージを調査することを第一義としながらも、将来的にはより効果的な翻訳・通訳教育に資することを視界に入れて分析を行いたい。

### 3. 調査の概要

本研究では、筆者が2011年4月～2014年7月にかけて、5つの大学の翻訳授業において行った自由回答式質問紙調査の結果を整理・分析する。より具体的には、未修者と既修者を比較することで受講生の経験の変化を調べることを目的とした。未修者がどのような既修者に変化するかということは、あらゆる教育者が知りたいことであり、翻訳の授業も例外ではない。日本の大学での翻訳授業は、必ずしも職業としての翻訳者養成を目指しているわけではない(長沼 op.cit.)。それでも、翻訳が人気のある授業であることは、大学における翻訳通訳専門コースの数が増えていることからわかる(染谷 op.cit.)。それでは、これらの学習者たちはい

ったいどのようなイメージを抱き、どのような暗黙の目的を抱いて授業に臨むのだろうか。

### 3.1 調査対象

数が増えているとはいえ、実務経験者が指導する実践的な翻訳演習を行っている大学はまだ少なく、サンプル数の確保には限界があるが、今回の調査対象となった大学と、それぞれの調査時期は以下のとおりである。

表1 調査対象の大学とクラス数・人数

未修者 (137人)	A大学	2013年4月	2クラス27人
	B大学	2012年4月	1クラス9人
	C大学	2011年4月	1クラス8人
	D大学	2012年4月、2013年4月、2014年4月	3クラス93人
既修者 (145人)	A大学	2013年度末、2014年前期末	2クラス59人
	D大学	2012年度末、2013年度末、2014年前期末	3クラス76人
	E大学	2014年度末	1クラス10人

いずれの授業も英→日翻訳を扱い、メタ言語としては応用言語学・翻訳研究の知見を引用しているが、前述のように、さまざまな素材を実際に訳していく演習形式である点で共通している。教員は大学ごとに異なり、筆者自身も含めた、通訳・翻訳を専門とする教員である。履修生は英語を専攻とする学生が大半だが、一部その他の外国語を学ぶ学生も混じっている。学年は2年生が中心の入門的クラスであり、未修者グループに対しては、他の授業を受けたり仕事として翻訳をしたりしていないか(実質的な既修者でないか)を質問し、今まで一度も翻訳の授業を受けたことがない未修者の回答のみを分析対象とした。合計人数は未修者137人、既修者145人で、うち47人は授業前・授業後の両方に回答している。従って以下の分析は、未修者・既修者が同一であることを前提としたものではなく、あくまで全体的傾向同士の差異の分析とする。

### 3.2 質問の内容

上述のとおり、5年間に行った質問紙調査回答のうち、受講生のイメージを問う以下の5つの質問への回答を分析対象とした。

表2 質問とその文言

未修者	受講前の印象	1. 翻訳といわれたときどんなイメージを思い浮かべますか？ いくつ挙げてもかまいません。
	授業への期待	2. 翻訳の授業に何を期待しますか？ いくつ挙げてもかまいません。
	将来への期待	3. 翻訳の授業は将来どう役立つと思いますか？ いくつ挙げてもかまいません。
既修者	受講後の印象	1. 翻訳の授業を受けてみて、翻訳に対してどのようなイメージを持ちましたか？ いくつでもあげてください。
	成長実感	2. 翻訳の授業を振り返ってみて、伸ばすことができたと思うところはありますか？具体的に3つ書いてください。

### 3.3 分析方法

上記の質問のうち、未修者の「受講前の印象」「授業への期待」「将来への期待」、既修者の「受講後の印象」「成長実感」を、それぞれまとめて「イメージ」に関する質問とし、未修者・既

修者での変化を比較した。具体的には、未修者・既修者の回答における全体的なデータの特徴（語彙の出現頻度と異なり語数）、多変量解析、および対応分析により、未修者・既修者における翻訳イメージの違いを質的に分析した。

なお多変量解析では自由回答のような質的データを分析するためのテキストデータ統計分析ソフト KH Coder を用い、自己組織化マップを作成した。従来、自由回答のような定性データは手作業で回答にコードを与えていたが、コンピュータを用いることによってデータを数値化できるようになった（川端 2001）。この方法には大量データの処理、反証可能性、共同研究を可能にするといったメリットがあり（Seale 2000）、分析者のバイアスを回避することもできる（川端、樋口 2003）。KH Coder には、回答に出現した単語の散布を示すさまざまな統計手法を用いる機能がそろっているが、本調査では、先行研究の存在しない「翻訳学習者の経験」というテーマにおいて仮説生成を目的とすることから、言葉と言葉の多次的な詳細な分析よりも、複雑で階層的な関係を 2 次元平面に表現できる自己組織化マップ（self-organizing map）を用いた（樋口 2014）。

これに加え、マップの分析では、調査対象となった履修生の一部にマップを見ながらのインタビューを行い、分析結果の裏付けとした（詳細は 3.2 参照）。

### 3.4 コーディング

未修者・既修者の回答全体を多変量解析しても、出現する語がばらばらに分散して特徴をつかむことが難しい。また KH Coder を利用して分析する場合、KH Coder が拾う使用語（KH Coder では助詞・助動詞など、どのような文にも出現する語は分析対象から外している）のみに絞ってもかなりの数となって解釈が難しくなるため、データ内の似通った語彙をグループに分けて命名するコーディング（coding）作業を行った。日本語の場合、自由回答のコーディングは適度な長さの文字列を、いっさいの文脈から切り離して、日本語形態素分析ソフトとコンピュータを使って抽出することから始まる。抽出した語から極端に短い文字列、意味のない文字列を除き、残った文字列をなるべく客観的に人手で分類していく。具体的には、筆者 1 名で作業を行い、まずデータ中の頻出 150 語について、似た意味のものをグルーピングした後、それぞれの語彙の出現文脈を確認する——という往復作業を繰り返しながら、グルーピングを確定していった。本調査では比較を前提としていることから、未修者・既修者それぞれの回答についてコーディング作業を行ったのち、両者のコードを統合した。さらに、後述する調査協力者の一部に対するインタビューにおいて、コーディングの妥当性を尋ね、違和感がないことを確認し、コーディングの信頼性を担保した。表 3 は最終的なコーディングのルールで、左列がコード名（主題）、右列がそのコードのもとに抽出される語のリストである。このルールを KH Coder に入力して、データの多変量解析を行った。

表3 コーディングルール

*イメージ	イメージ
*コミュニケーション	伝える or コミュニケーション or 会話 or 話す or 話せる or 読み手 or 相手 or 伝わる or 読者
*コンテキスト	流れ or 全体 or 文脈 or それぞれ or 背景
*速度	速い or 時間 or スピード
*意見	意見 or 視野
*意識	意識 or 見る or 気づく or 心がける or 気 or 考慮
*意味	意味 or 内容 or 言う
*英語	英語 or 英文 or 英
*面白さ	楽しい or 興味
*外国	外国 or 海外
*変える	変える
*原文	文章 or 書か or 文 or 文書 or 原文
*言語	言語 or 母語
*語彙	単語 or 語彙 or ポキャブラリー
*向上	向上 or スムーズ or 増やす or アップ or 上手 or 増える or 上達 or 上がる
*広がり	様々 or たくさん or 広がる or 深い or 多い or 幅 or 幅広い or 多く or いろいろ or さまざま
*考える	考える or 頭
*差異	ニュアンス or 違う
*作業	作業 or 取り組む
*自然	自然
*思う	思う or 感じる
*字幕翻訳	映画 or 字幕
*自分	自分
*実益	仕事 or 役立つ or 就職 or 将来 or 企業 or 職 or 職業 or 役に立つ or 使う or 使える
*実際	実際 or 実感
*習得	身 or 学ぶ or 得る or 学べる or 勉強 or 覚える
*授業	授業
*人	人
*正確	正確 or 正しい or 適切
*専門	専門
*想像力	想像
*大切	大切 or 重要
*知識	知る or 知識 or 情報
*ニュース	新聞 or 雑誌 or 記事 or 資料 or ニュース
*直訳・意訳	直訳 or 意訳
*通訳	通訳
*難しさ	難しい or 必要 or 大変
*日本	日本人 or 日本
*日本語	日本語 or 日
*能力	訳せる or 能力 or 読める or 力 or 技術 or 出来る or スキル
*判断	判断 or 選ぶ
*表現	表現 or 言葉 or 言い回し
*文化	文化
*文芸翻訳	本 or 小説 or 洋書 or 絵本 or 文学
*文法	文法 or 構造
*翻訳	翻訳 or 訳す or 変換 or 訳
*方法	仕方 or 使い方 or 方法 or 工夫
*理解	理解 or 読む or 解釈 or 読解 or 分かる or 読み取る
*リサーチ	調べる or リサーチ or 辞書 or 検索

#### 4. 分析

本章における分析の目的は、未修者と既修者のデータを比較し、授業を経ての翻訳学習者の「翻訳に対するイメージ」の変化を見ることである。

#### 4.1 データの全体像

未修者と既修者のイメージを問う質問(受講前/受講後の印象、授業/将来への期待、成長実感。表 2 参照)への回答を集計すると、未修者(4 大学 7 クラス 137 名)および既修者(3 大学 6 クラス 145 名)それぞれの回答から抽出された語数は、未修者が総抽出語数 9400/異なり語数 1047、既修者が総抽出語数 12827、異なり語数 1299 だった。一人当たり換算すると未修者が総語数 68.61/異なり語数 7.64、既修者が 88.46/8.95 で、いずれも既修者が増えている。一人当たりの総語数の増加は、既修者のほうが語ることが増えて饒舌になったことを示す。また語の出現頻度(総語数÷異なり語数)は 8.978/9.875 と、未修者より既修者が増えているのは、既修者のほうが何らかの話題について詳しく語っていることを示している。

#### 4.2 分析の方法

未修者・既修者の比較を行うため、コーディングされた両者のデータから自己組織化マップを作成すると同時に、両者間で大きな差異の出た主題の量的傾向を見るためクロス集計を行うこととした。自己組織化マップでは語/主題の出現数でなく、出現パターン(どのような語/主題同士が似通った文脈で使われていたか)を観察するとともに、KH Coder が自己組織化マップの分散に基づいて Ward 法で算出する主題のクラスター分けについても見ていく。またクロス集計については、自己組織化マップで表現できない、各主題間の量的対応関係を観察する。さらにそこで観察された授業前後の特徴的な違いについて、関連語検索(主題と一緒に使われることの多い語の検索)を用いて、さらに詳しい分析を行った。

まず、未修者・既修者のデータを合わせて作成したコーディングルール(表 3)を用い、KH Coder を使って自己組織化マップを作成した。ただし、未修者・既修者の特徴づけに役立たないと思われる主題、<思う><人><日本><翻訳>は除外した(以下、コーディングルールにおける各主題は< >で囲んで表示する)。この自己組織化マップの分析では、前述の素材別分類(未発表)に基づいて、傾向が異なると思われる受講生 3 名を選び、それぞれにインタビューを行って分析の助けとした。インタビューの時期は質問紙調査の半年後で、3 人別々に各 30 分程度の面接を行い、コーディングルール、および未修者・既修者の自己組織化マップを示して説明し、コーディングルールの適否、および自己組織化マップにおける主題グループに対するインタビューの解釈(グループ分けが妥当と感じられるか、どうして特定の主題が同じグループになると思うか等)を尋ねた。

各コード(主題)の出現数のクロス集計では、カイ二乗値の大きい(未修者・既修者の差の大きい)12 の主題に特に注目して分析を行った(表 5 の網掛け部分。なお表 5 の  $\chi^2$  乗値に表示されているアスタリスクの数は、1%水準で有意な場合は 2 つ、5%水準で有意な場合は 1 つである)。なお「思う」「翻訳」「授業」の 3 つの主題については、大きな差が出ているものの、文脈検索において特徴を見出すことができなかったため除外した。

図4 未修者(左)・既修者(右)の自己組織化マップ

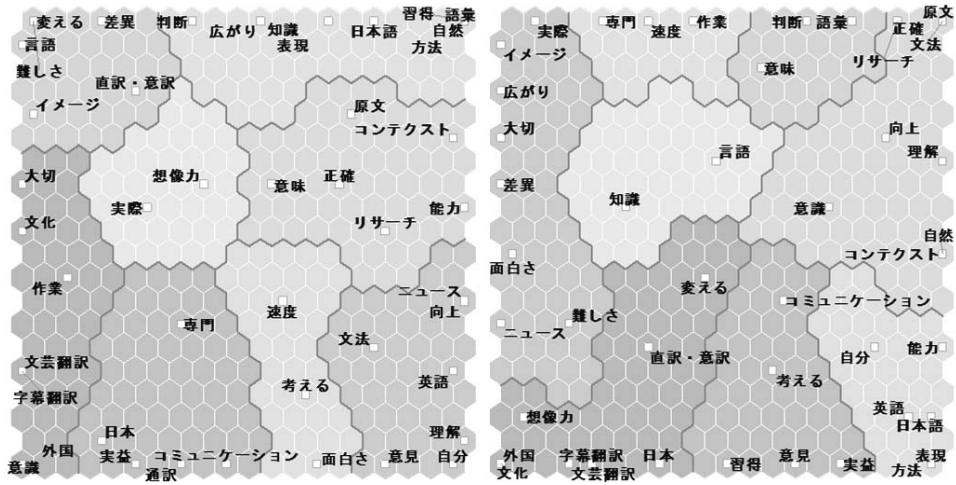


表5 主題別の出現数の未修者・既修者比較クロス集計

主題	イメージ	コミュニケーション	コンテキスト	速度	意見	意識	意味	英語	面白さ	外国	変える	原文	言語	語彙	向上	広がり	考える	差異	作業	自然	思う	字幕翻訳	自分	実益	実際
未修者	21 (6.40%)	57 (17.3%)	13 (3.96%)	14 (4.27%)	13 (3.96%)	10 (3.05%)	27 (8.23%)	162 (49.3%)	7 (2.13%)	56 (17.0%)	5 (1.52%)	55 (16.7%)	29 (8.84%)	48 (14.6%)	65 (19.8%)	54 (16.4%)	14 (4.27%)	22 (6.71%)	10 (3.05%)	7 (2.13%)	47 (14.3%)	43 (13.1%)	33 (10.0%)	87 (26.5%)	4 (1.22%)
既修者	23 (9.47%)	49 (20.1%)	42 (17.2%)	17 (7.00%)	4 (1.65%)	52 (21.4%)	59 (24.2%)	82 (33.7%)	22 (9.05%)	2 (0.82%)	9 (3.70%)	77 (31.6%)	5 (2.06%)	47 (19.3%)	77 (31.6%)	20 (8.23%)	56 (23.0%)	17 (6.98%)	16 (6.58%)	11 (4.53%)	98 (40.3%)	6 (2.47%)	37 (15.2%)	37 (15.2%)	17 (7.00%)
合計	44 (7.71%)	106 (18.5%)	55 (9.63%)	31 (5.43%)	17 (2.98%)	62 (10.8%)	86 (15.0%)	244 (42.7%)	29 (5.08%)	58 (10.1%)	14 (2.45%)	132 (23.1%)	34 (5.95%)	95 (16.6%)	85 (14.8%)	110 (19.2%)	59 (10.3%)	39 (6.83%)	26 (4.55%)	18 (3.15%)	145 (25.3%)	49 (8.58%)	70 (12.2%)	120 (21.0%)	21 (3.68%)
χ <sup>2</sup> 乗値	1.44	0.54	26.94***	1.53	1.86	46.68***	26.86***	13.33***	12.46***	38.63***	1.94	16.65***	10.29***	1.9	13.89***	3.48	29.07***	0	3.24	1.89	48.44***	18.81***	3	13.32***	11.56***

主題	習得	授業	人	正確	専門	想像力	大切	知識	ニュース	直訳・意訳	通訳	難しさ	日本語	日本語	能力	判断	表現	文化	文芸翻訳	文法	翻訳	方法	理解	リサーチ	ケース数
未修者	38 (11.5%)	4 (1.22%)	29 (8.84%)	21 (6.40%)	7 (2.13%)	4 (1.22%)	8 (2.44%)	56 (17.0%)	25 (7.62%)	16 (4.88%)	9 (2.74%)	61 (18.6%)	9 (2.74%)	118 (35.9%)	68 (20.7%)	4 (1.22%)	50 (15.2%)	10 (3.05%)	68 (20.7%)	7 (2.13%)	134 (40.8%)	14 (4.27%)	94 (28.6%)	3 (0.91%)	328
既修者	38 (15.6%)	25 (10.2%)	14 (5.76%)	30 (12.3%)	8 (3.29%)	10 (4.12%)	17 (7.00%)	52 (21.4%)	10 (4.12%)	37 (15.2%)	0 (0.00%)	77 (31.6%)	5 (2.06%)	84 (34.5%)	64 (26.3%)	12 (4.94%)	53 (21.8%)	15 (6.17%)	16 (6.58%)	26 (10.7%)	162 (66.6%)	36 (14.8%)	87 (35.8%)	49 (20.1%)	243
合計	76 (13.3%)	29 (5.08%)	43 (7.53%)	51 (8.93%)	15 (2.63%)	14 (2.45%)	25 (4.38%)	108 (18.9%)	35 (6.13%)	53 (9.28%)	9 (1.58%)	138 (24.1%)	14 (2.45%)	202 (35.3%)	132 (23.1%)	16 (2.80%)	103 (18.0%)	25 (4.38%)	84 (14.7%)	33 (5.78%)	296 (51.8%)	50 (8.76%)	181 (31.7%)	52 (9.11%)	571
χ <sup>2</sup> 乗値	1.65	21.96***	1.49	5.353*	0.35	3.76	5.878*	1.43	2.41	16.54***	5.121*	12.34***	0.06	0.07	2.16	5.788*	3.64	2.55	21.15***	17.26***	36.22***	18.13***	2.97	60.18***	

図4と表5を使い、実際に調査に回答した受講生3名のインタビューにおける意見も取り入れ、さらに関連語検索を交えながら未修者・既修者を比較した分析結果は、以下のとおりである。

(1) 全般的なイメージの明確化

上述の総語数・異なり語数・出現頻度から見た傾向においても、自己組織化マップに対する筆者およびインタビューした履修生の直感的印象からも、既修者のほうが未修者より概念がまとまっていることが観察できる。おぼろげだった翻訳のイメージが、授業後はつながりのある言葉によって語れるようになったと言える。また表5のカイ2乗値を見ても、未修者・既修者で差の出た項目数は既修者のほうが大幅に上回り、既修者において特定の主題への集中が高



まっていることがわかる。このことから、そうした主題に関する概念がまとまったことが観察できる。とはいえ、いかなる授業も受講生の概念が整理されることを目指すであろうから、それだけでは有用な分析とは言えない。以下の項目は自己組織化マップやクロス集計から観察された、未修者・既修者の特徴的变化についての分析だが、それは受講生の概念が“どのように”まとまったのかを示唆するものと言えるだろう。

(2) 翻訳がより身近に

未修者の翻訳に対するイメージの特徴と見られる<文芸翻訳><字幕翻訳><外国>が既修者では大幅に減る。未修者における<文芸翻訳><字幕翻訳>の出現文脈は、「翻訳は主に海外の本や映画、漫画に使われているイメージがある」「映画やドラマの翻訳の製作工程を見てみたい」「外国語で書かれた本などを日本語に訳すイメージ」「絵本や小説など英語から日本語にすること」「ハリーポッターなどの洋書を訳している」(下線は筆者による強調。以下同様)などといったものがあり、未修者においては自分とは遠い「プロの作業を意識」し、翻訳を「難しい」もの、自分とは「違う世界」(以上、受講生インタビュー)に属する近づきたいものにとらえていたと考えられる。さらに<外国>という主題でも、最も頻出する関連語は「本」であり、<文芸翻訳><字幕翻訳>と近い関係にあると思われる。これらの主題の出現が既修者で大幅に減ったということは、近づきたい別世界という遠さが消滅したと考えられる。

(3) 経験することで感情が入る

既修者のマップにおける<作業><速度><専門>のクラスターは、授業時の経験を振り返って、「自分の作業工程を意識した回答」(受講生インタビューより)になっていると思われる。例えば<速度>の主題では、未修者の関連語が「使える」「読む」「増える」「単語」等、今後のスキル向上への期待を示しているのに対し、既修者の関連語検索では「作業」「正確」「上がる」など、実際に速度を達成するプロセスが目には浮かぶような具体的な語が使われている(既修者の<速度>には手間がかかるゆえの「速度の遅さ」も含まれている)。さらに、<作業>という主題について、関連語検索により<作業>がどのような語と共起しているかを見てみたい。

表 6 <作業>の関連語検索

未修者		既修者	
1	期待 0.154	1	時間 0.191
2	直す 0.154	2	実感 0.143
3	様々 0.143	3	文章 0.132
4	出来る 0.133	4	持つ 0.125
5	初心者 0.100	5	様々 0.125
5	黙々と 0.100	6	物語 0.125
5	当てはめる 0.100	7	最も 0.118
5	PC 0.100	8	痛感 0.118
5	プロフェッショナル 0.100	9	特有 0.118
5	レベル 0.100	10	単語 0.114
5	思い出す 0.100		
5	難易 0.100		
5	相当 0.100		
5	初めて 0.100		
5	面白み 0.100		
5	込める 0.100		
5	特別 0.100		
5	成り立つ 0.100		
5	奥深い 0.100		
5	容易 0.100		

(数値は Jaccard の類似性測度<sup>1</sup>。上位 10 項目、同率を含む:以下同様)

既修者において、「実感」「痛感」という言葉が目を引く。それぞれの語の文脈(KWIC 検索)を見ると、「単語の一つ一つが文においてどんな意味をもち、どんな役割を果たしているか考えなければこなせない、難しい作業だと実感したと、難しさに結びつけている場合もあれば、「英文を日本語に訳すという作業をこれほどきっちりする授業はこの翻訳の授業だけなので新鮮でもあり、しっかりと自分の力になっているという 実感があ」と、前向きにとらえている例もあった。授業前にはなかった「作業がプチ体験できたから、面白さとか難しさとか、感情が入ってきた」(受講生のインタビュー)と言えるだろう。

#### (4) 実益志向の変化

<英語>と<日本語>が未修者では遠かったのが、既修者では近づいた。未修者で<英語>が独立しているのは英語力向上への関心が高いためとすれば、未修者は英語力向上に期待をもつが、既修者はそうした期待を脱却するに至ったと考えられる。未修者の<英語>が<ニュース><向上><文法><理解>などと近いのに対し、既修者の<英語>は<日本語><表現><方法>などと近いことも、未修者の英語力向上への期待を示す。一方、<実益>という主題でも、未修者では「外国人と仲良くなれるようになりたい」「海外で活躍できる」などの文脈で現れており、海外・外国などの直接的実益と結びついていたのが、授業後は、「表現や意見、能力などのほうこそが実益」(インタビュー)というように、実益の中身が変化している。未修者では英語や海外での仕事などの直接的な利益がイメージされているのに対し、既修者ではより抽象的な能力における利益が意識されている。

#### (5) 考える「コミュニケーション」へ

授業前は<通訳><実益><コミュニケーション>がクラスターをなしていたのに対し、授業後は<通訳>は消え、上述のように<実益>の中身も変化した。では、<コミュニケーション>にも変化が現れたのだろうか。以下は<コミュニケーション>の関連語検索の未修者・既修者比較である。

表 7 <コミュニケーション>の関連語検索

	未修者	既修者
1	外国 0.182	考える 0.324
2	英語 0.175	翻訳 0.207
3	人 0.147	日本語 0.182
4	仕事 0.132	読む 0.167
5	自分 0.125	原文 0.158
6	海外 0.122	訳す 0.144
7	訳す 0.105	言葉 0.129
8	理解 0.103	理解 0.127
9	思う 0.096	文化 0.123
10	考える 0.079	意識 0.123

<コミュニケーション>の主題の出現数は未修者 57 件 (17.38%)、既修者 49 件 (20.16%)とあまり変わっていないが、表 7 に見るように中身はだいぶ変わっている。未修者では、「英語を

使った職業についての時や、外国人とコミュニケーションをとる時(に役立つ)」というように話し言葉を想定していたのに対し、授業後は中身が書き言葉に変わったことは当然としても、表7の共起語が示すように<コミュニケーション>と「考えること」が結びついている点が重要である。文脈検索でも「誰にもでも伝わるか、どんな文体が日本語として適切かといったようなことを考えながら訳すようになった」「どうやったら読む人にわかりやすい表現にできるか、考えるようになった」など、昨今の英語教育で重要視されている「コミュニケーション」への見方も変化していることが注目される。

#### (6) 言語形式から意味へ、訳の工夫へ

言語形式にとらわれていた状態からの脱却は、翻訳授業の効果として当然、予想されることであり、また多くの翻訳授業において目指されている目標でもあろう。ここではそうした変化を、本データにおける①<意味>の変質、②<直訳意識>を中心とした訳の工夫へ、③<コンテキストの意識>、④リサーチの重要性という4つの視点から分析したい。第1に<意味>という主題において、未修者では<正確さ>や<原文>と近かったのが、既修者では<判断>と近くなった。文脈検索でも「ただ言葉の意味通りに訳すだけではない翻訳のむずかしさを知りました」「ただ訳すだけでなく、読み手やもとの文章の背景まで考えて意味をとらえていくことが重要だということが分かり」「単語をいちいち調べて訳すよりも、全体を読んで雰囲気や言いたいことをしつかりと掴むことの方が大事だと思いました」など、意味は判断すべきものにも変わったようだ。第2に、<変える>と<直訳意識>は授業前も授業後も距離が近く、一体である点は同じだが、未修者では<差異>や<言語>と近かったのに対し、授業後はどの項目とも離れて孤立しており、きわだった意識として独立したと言える。<変える>が「訳の工夫」を意味するとしたら、実体験の後には、あくまで<直訳意識>を中心とはいえ、訳の工夫が展開するようになったといえるだろう。実際、出現文脈を見ると、既修者の<変える>はTT(目標テキスト)の表現法を変える、ST(起点テキスト)と語順を変える、といった意味で使われており、受講生インタビューでも、「ただ訳すだけではだめと授業後に分かった」という発言があった。

#### (7) コンテキストとリサーチの重要性

<コンテキスト>という主題は授業前にほとんど見られなかったのが、授業後では出現頻度が増えている。授業後の<コンテキスト>の出現文脈をみると、「辞書に載っている単語の意味をうのみにせず、文章全体の流れを見て単語の意味を考えるようになった」「大まかに文章の流れをつかむこと」「原文の英語の細かい言葉づかいや、逆に全体の構造を意識しながら訳せるようになった」などがあり、インタビューでも「語彙がわかれば自然な訳になると思っていたが、(授業後は)コンテキストがわかると自然になると思った」との発言があった。また<リサーチ>は授業の前後で最も増えた語であり、<文法>のほか<正確><原文>ともつながった。出現文脈では「専門用語や役職名、人名などは正確に訳す必要があったため、徹底的に調べるようになった」「背景知識を調べてから、課題に臨むという姿勢」「翻訳とは、ただ訳すだけではなく、訳す前のリサーチがとても大切だということが分かった」などの言葉があり、リサーチの概念が明

確化していると言える。未修者ではばらばらだった<語彙>と<リサーチ>のつながりも、授業後は「ひしひしと感じた」(インタビュー)というほど強く結びついた。既修者のマップでは<リサーチ>が<コンテキスト><自然><向上><理解><文法><正確><原文>などとともにひとつのまとまりを形成していることは注目に値し、これは英語学習と一線を描き、リサーチ(背景調査)を中心とした翻訳授業の効果として挙げることのできる点だろう。

## 5. 結論

まとめとして、本稿でとりあげたデータにおいて、翻訳授業未修者の翻訳に対するイメージは、授業後に明確になったと言える。その過程で、翻訳がより身近になったこと、実体験を経て翻訳に対する感情が生まれたことといった全般的な傾向のほか、翻訳に英語力や語彙力の強化を求める実益志向が、表現や意見を言う力など、より幅広い効用をもたらす利益を求める姿勢に変わったこと、外国人と英語で話したいという素朴な期待が、言葉をわかりやすく伝達するコミュニケーションへの気づきが変わったことが指摘できる。また翻訳の授業をとおして言語形式から、状況に合わせて意味を選び取る判断の重要性、訳の工夫、コンテキストへの意識という、より状況対応型のプロセスがイメージされるようになったことも挙げられる。これは従来、翻訳授業に対して一般的に言われることと変わらないが、ここではリサーチの存在が大きく増したこと、またリサーチを中心としてコンテキストや意味などの状況対応的意思決定への移行が起きていると思われることが重要であろう。

### 【謝辞】

本稿は神戸女学院大学特別研究休暇制度を利用して分析・執筆した。ご指導頂いた大阪大学人間科学部川端亮教授、原稿に適切な助言を頂いた本誌査読者および同僚の景山佳代子准教授、また調査協力大学の教員・受講生の皆様に謝意を表したい。

### 【筆者紹介】

田辺希久子(TANABE Kikuko)神戸女学院大学文学部英文学科教授。英日ノンフィクション出版翻訳者。専門は翻訳研究・翻訳教育。連絡先は [tanabe@mail.kobe-c.ac.jp](mailto:tanabe@mail.kobe-c.ac.jp)

### 【注】

- 1) Jaccard の類似性速度は 0 から 1 までの値をとり、関連が強いほど 1 に近づく。Jaccard 係数は語が共起しているかどうかを重視する係数であり、1 つの文書の中に語が 1 回出現した場合も 10 回出現した場合も単に「出現あり」と見なして、語と語の共起をカウントする。また語 A と語 B のどちらも含まない文書が多いからといって、AB 間の関連が強いとはみなさない。このため質問紙調査の自由回答のように、1 つの文書に含まれる語の数が少なく、それぞれの語が一部の文書中にしか含まれていないようなデータで、語と語の関連を見るには適した係数である。

【参考文献】

- Bilodeau, I. (2013). Discursive Visibility: Quantifying the Practice of Translator Commentary in Contemporary Japanese Publishing. In G. González Núñez, Y. Khaled & T. Voinova, *Emerging research in translation studies: Selected Papers of the CETRA Research Summer School 2012*. Leuven: CETRA.
- Elbaz, F. (1981). The Teacher's "Practical Knowledge": Report of a Case Study. *Curriculum Inquiry*, 11(1): 43-71. Taylor & Francis, Ltd. [Online] <http://www.jstor.org/stable/1179510> (Jul. 8, 2015).
- Minamitsu, Y. & K. Tanabe. (2012). "Bridging the Motivational Gap: Research on Translation Courses in Japan." *Conference Papers of 16th International Conference on Interpreting and Translation Teaching: Experiences, Creativity, and Strategies*. (pp. 369-382). Taiwan Translation Society.
- Tanabe, K. & K. Mitsufuji. (2007). *Practical skills for better translation*. Tokyo: MacMillan Languagehouse.
- Tanabe, K & Y. Minamitsu. (2010). "Translation Learning in Japanese Colleges and Universities: From Students' Point of View" *FIT 6th Asian Translators' Forum Proceedings*. (pp. 590-600). Macao: University of Macau.
- 綾部保志 (2009)「戦後日本のマクロ社会的英語教育文化:学習指導要領と社会構造を中心に」綾部保志編『言語人類学から見た英語教育』ひつじ書房
- 江利川春雄(2008)『日本人は英語をどう学んできたか:英語教育の社会文化史』研究社
- 樋口耕一 (2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 伊村元道(2003)『日本の英語教育 200 年』大修館書店
- 川端亮 (2001)「コンピュータを用いた自由回答のコーディング」『社会情報』10 卷 1 号、札幌学院大学社会情報学部
- 川端亮・樋口耕一 (2003)「インターネットに対する人々の意識 —自由回答の分析から—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第 29 号:161-181. 大阪大学大学院人間科学研究科
- 田辺希久子・光藤京子 (2008)『英日英 プロが教える基礎からの翻訳スキル』三修社
- 水野的 (2011)「明治・大正期の翻訳規範と日本近代文学の成立」佐藤ロスベアグ=ナナ編『トランスレーション・スタディーズ』みすず書房
- 長沼美香子(2008)「アンケートに見る日本の大学翻訳教育の現状——翻訳教育実態調査の集計と分析」『通訳翻訳研究』第 8 号:285-297. 日本通訳翻訳学会
- 氏木孝仁編著 (2010)『翻訳入門—英日編』(改訂新版) 大阪教育図書
- 染谷泰正 (2010)「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『関西大学外国学部紀要』第 3 号 関西大学

